

第2回北播磨新地域ビジョン検討委員会 議事録要旨

1 日時：令和2年12月22日(火)17:00~18:00

2 形式：オンライン会議

3 出席者：

委員：田中委員長、内藤副委員長、松本委員、三宅委員、奥貫委員、山本委員、中野委員、徳岡武義委員、河越委員、徳岡和秀委員、降松委員、入江委員、藤後委員、下岡委員、谷尾委員、(欠席委員：依藤委員、真鍋委員)

県側：上田局長、野村副局長、須貝室長、小林班長

4 内容

(1) 北播磨地域アンケート結果による第1・2回書面会議委員意見

[委員長]

・議題1の北播磨地域ビジョンアンケート結果に対する意見について、先に事務局からお知らせしているとおり、本日は資料の1による委員意見を共有する機会として、アンケートで気になること、或いは補足や特に強調しておきたいことを、資料1の順番に従って、簡潔に発言いただきたい。

[委員長]

1 ページ将来像に関して、特に今後の参考になるのは、北播磨に来てもらうための場として、今までは私的なレジャーや観光のための交流資源だったが、それを公的な平和教育、自然教育、歴史教育や社会教育のように、北播磨が持っている各資源、環境施設を有効に使うことによって、教育や学びの要素で公的な集団に足を向けてもらうことが十分に可能ではないかと考える。そのためには5市1町の一体感が重要である。

残したいものに関しては、残したいことにこだわりすぎて活性化の枷になるということがあり得るが、その活性化と残したいものが共存できるというような方策を考えていくことが極めて重要ではないか。例えばその一つとして、農業に関することで、個人が兼業的な働きのみで、組織的に統合運営を展開する方法があり得るのではないか。

重要な課題は、若者も年配者も同じく、特に若者は、交通インフラ等の関係で都市化を望む回答が非常に多い。その都市化は現在の都市と同質を目指す意識ではあるが、ここは視点や観点を変えて今までとは違う見方をする必要はある。それを地域住民に理解してもらうことが重要で、特に県民局を中心に努力が必要ではないか。例えば、自然環境の保全と、産業の育成・活性化、企業誘致などによる就労場所の確保、交通インフラ、商業施設、娯楽施設等の充実による生活の利便性向上等は、全部を合わせると共存することが難しい課題のように見える。それをどのように取り込むか、雇用や働き方の変化を考えながら、ワークとバケーションを合わせた造語としてのワーケーション等を取込む地域が北播磨であることをアピールする要素を整理し、地域住民に理解してもらうということが大事だろう。

誇りとしては、地域の方々は北播磨の良さを外にアピールすることの重要性を考えているので、北播磨地域の各市町が一体化して典型的なプランをアピールし、継続的な広がりを持たせていけば、今後の30年のビジョンがおのずと見えてくるのではないか。

[副委員長]

1点目は、将来に向かってもっと農業を振興する必要性。農業の活性化策の観点で、一つ目はアグリーリゾートの立ち上げを提案する。農林業関係の中心的な施設として、また都会人の憩いの場所として、農村や里山などを有効に活用すること。山梨県の小菅村は空き家をホテルにしており、私がイメージしていることを展開していたのでホームページをご覧いただきたい。二つ目の観点は、有機農業を中核として位置づけ、有機農業の学校や実習圃場を設け、体験・滞在型の農業体験を提供すること。三つ目の観点は、食料自給率の向上である。兵庫県は47都道府県の中で食料自給率（カロリーベース）が16%で39位である。播磨平野をはじめ海・河川や山に恵まれた地域特性を生かし安全で良質な食の提供ができる地域発展を目指すべきである。

2点目は、今や観光は産業化され今後も地域活性化の大きな柱としてその成長が期待できる分野である。しかしその推進体制は各市町で協議会等の団体が運営しているところが多く、市町行政と県更に民間や専門機関が一体になり、より広域で深みのある観光政策の推進体制を整備しなければならないのではないかと。

3点目は、これからの社会は現在定住している人だけでなく、外国も含めた他地域から多くの人々が北播磨地域に移住する。郷に入っては郷に従えというだけでなく、共に新たな暮らしを作っていくことが大切である。寛容で開かれた社会としての多文化共生社会を創っていくことが大きな課題である。現在世界人口の61億のうち40億人がアジアに住んでいる。マレーシアやシンガポールは多文化共生社会に転換し大きく発展してきた。

4点目は、日本総研から「47都道府県の幸福度ランキング2020年版」が昨年9月に発行されているが、その報告書の内容も併せて考慮したほうが良いのではないかと。兵庫県の総合幸福度は34位である。健康、文化、生活では上位の指標も多くあるが下位の指標に注目したい。報告書では、「若者完全失業率（31位）、正規雇用者比率（42位）、高齢者有業率（44位）、女性の労働力人口比率（45位）、待機児童率（46位）、悩みやストレスのある者の率（47位）などが低迷しており、雇用環境の安定への取り組みが求められる」と記されている。

[委員]

アンケート結果から読み取ったことの一つは、人口減少の対応に留意しつつ地域がほどよく活性化していくことを望んでいるということだ。同時に交通インフラに代表される、不便さに対する改善の期待も非常に多く示されていた。北播磨の良さは十分認識しつつも、今のままでは十分に満足できないという見方も多かった。適度に便利さを加えていくところがポイントになるのかもしれないが、30年後は新しい技術が補ってくれるということも考えられる。今でも都市から1時間ほどで往来できる場所であるから、インフラがより改善された地域になれば、都市部とちょうどよい距離になる。このような変革に期待していけばいいのではないかと。とはいえ、人口減は減収に影響するので、適度な成長が求められバランスが大切かと思う。Society5.0時代にあって、どのように地域活性できるかということが、これからのポイントになると思う。自然環境と人の繋がりの方の良さや地元で仕事する環境づくりを今後も大事にしながら、北播磨地域を創るには「戻って来たくなる」、「住んでみたくなる」北播磨のイメージが必要だと思う。国際理解という視点も必要で、共生社会に向けてどのようにコミュニティを整備していくのかということも重要になると思う。歴史文化については

目玉がないという意見もあり、皆の知恵を出しながら北播磨のいいところを更に開拓していくことが必要ではないか。21世紀の働き方を北播磨に重ねてみると、ちょうどよい地域と思うので、ぜひ発展していただきたい。

[委員]

私はアンケートの結果をみて、以下の4点を指摘したい。

北播磨地域は農村部であるが都市的な生活を既に行っている。しかし、今後、20年～30年の間に、この都市化された生活も過去のものとなり、様相が大きく変化すると思う。急激な技術革新、最近のデジタルトランスフォーメーションが進展していくなかで、生活、自然、産業などさまざまな分野でテクノロジーをうまく活用した応用が必要になる。農村は土地利用が多様なため、新しい技術でそれらを適切に維持管理していくには、これまでの役割を新しい技術で代替していくことを積極的に検討すべきであり、その進展が強く望まれる。

伝統・文化の継承が非常に多く挙げられていた。残すべき価値の有無を検討し、色々な見方で伝統を整理していくべきだが、若者の考えが古い人達の考えと乖離していることから、実は意外と変えていく事ができるのではないかと気づくことがある。これに関連して、人材の観点から見ると、外部から若者をいかに増やすかという課題があげられる一方で、その地域内の若者たちが伝統文化の継承を含む地域の運営管理に参画できるような仕掛け、又は地域内外の人材をスムーズに交替・継承していく考え方が必要である。

北播磨管内の市町は、例えば西脇市とか加西市とか、「間にある都市」のあり方を再考すべき時期にきている。都市的な土地利用と農村・自然的土地利用の混在を含めた新たなまちのあり方を検討すべきである。また、農村は空間的には非常に広く、広大な土地をどのように管理していくのか課題である。すなわち、農地、家屋を含む住宅地、公共的な場所も含めてその維持管理のあり方が問われている。

最後にもう一つ、住まい方に関して海外では当たり前であるが、古い家は非常に使用に関しての循環がいいが日本はそうではない。それには、人の循環をどうするかを考えた方がよい。これまで都市からの定住を促す考え方でできているが、長期でなくとも5年とか10年で自由に入出りできるような垣根のない循環のある定住をもとにした住まい方、こういう動きがいかに受け入れられていくか、その考え方が将来の農村地域で求められているという気がする。

[委員]

私からは大きく3点ある。

1点目は、アンケートの目的と趣旨を踏まえると、現状の既存の枠組みや問題意識の延長線上から30年後を想定した回答であったと思う。事務局に確認したいことは、北播磨地域で今後30年間に起こりうる変化として人口動態予測は提示されているが、それ以外の予測整理と提示がしているのではないか。また北播磨地域の将来構想として北播磨地域外の外部環境、例えば、もっと変化していく可能性がある兵庫県、日本、世界との関係性にも着目しながら、北播磨地域がどうあるべきか、どう目指していくのかという検討を今後していくのか。確認であるが、これが1点目である。

2点目は、人材育成・活用についてである。特に若者からは「人と関わりたい」「外の人に来てほしい」という回答が挙げられていた。これは交流人口の話である。まず、地域内部の人材育成の視点からは、若者が「地元で何か失敗しても何か挑戦できる、私たちの地域はそういう場所だ」と言えること。北播磨地域では若者がそういったリアリティのある実践や経験を通して手応えを得ることができ、若者が地域にか

かわる当事者性の芽を大人が摘むことなく、若者が本当に挑戦して失敗できる場所であれば、地域外にも誇れるのではないかと。そのような取組みで若者が本気でチャレンジできる場となるような、何か地域のコンセプトを打ち出せないだろうか。

次に、地域外の人材の活用について。交流だけでなく、住んでもらうことでもなく、観光だけでなく、今で言う関係人口の話になる。私は北播磨地域外に住んでおり外部からの視点だが、いわゆる都市部では働き方やライフスタイルに多様な価値観や願望（夢）を持つ人が今後増えていくと考えられる。北播磨地域内・外の人たちが一緒になって知恵を合わせて、北播磨の社会課題に取り組めるようなことができる場所があればいいのではないかと。地域内とはまた異なるノウハウを持った地域外の人々が参画し、地元の若者などとの協働を通して、将来を担う人材育成にも貢献する。そうした土壌づくりは今後の地域資源となっていくのではないかと。

最後に3点目は、アンケート回答で頻出していた「ほどよい田舎」という表現について。「ほどよい田舎」の実態とは一体何だろうか、と非常に掘り下げたいものである。地域ビジョンを考える中で「ほどよい田舎」というものに可能性を感じるのだが、それが一体何なのかを具体的に可視化・言語化されることが必要ではないかと。

「ほどよい田舎」は地域内・外の人（どのような人？）にとって、どのような価値や可能性が感じられる場・ことなのだろうか。ただ地域の魅力探しをするというのではなく、将来的に北播磨の魅力が関係人口の増加や地域での価値創造に寄与するよう、「ほどよい田舎」の可視化と言語化を戦略的に位置付けて、地域内・外の人々が協働しながら進められるとよいのではないかと考える。

[委員]

私は5市1町の特徴を活かした上で、「北播磨」全体の一体感を連携した地域ビジョンが重要だと考える。5市1町を繋いだ観光資源を深掘し、一体感のある観光資源へと発展すれば、交流人口を惹きつける新しいポイントになるのではないかと感じている。

また、今回のアンケートとは別に「北播磨の未来を描くワークショップ」全5回に見学した際に、20代～30代の若者が活発な議論をしていた。このような若者たち、強いては次世代が活躍する場が無いのではないかと感じた。柔軟な発想、世界的な情報や知識、技術を取り入れた考えをもつ若者達を、地域が低迷し高齢化や過疎化が進む地域社会だからこそ、次世代リーダーの育成や若者が活躍できる地域へと創り出せば、新しい地域活性を展開し先導していけるのではないかと感じた。

[委員]

アンケート全体から感じたのは10代から70・80代の方も同じ意見、交通インフラが整備されていない、産業がなく若者が活躍できる場がないなど似通っていた。私の出身は西脇市で現在は小野市に住んでおり思うことは、北播磨地域は山田錦等で世界に誇れるものがあるなかで、観光業は市が取り組むこと民間で取り組むことを区別しているところを、5市1町が一緒に連携すればいいと思っている。

私と同じ“ママの働き方応援隊”の活動をしている但馬メンバーたちが赤ちゃんタクシーを営業しており、子ども4人いるママが地元のタクシー会社と一緒に観光地に案内している。小野市でも小野タクシーがあり、その乗務員は70歳以上で、乗務員のなり手がいないという話を聞いた。各市町にコミュニティーバスが運行されているが、運行本数が少ないことからタクシー需要があるようだ。タクシー運転手は時間の都合をつけやすいため、私の考えでは女性が活躍する場として適している

のではないかと思っている。これから30年後、大企業は10分の1に減員されていく予測で、何十年後、何年か後には、夫が失業することもあり得ると感じているため、女性が活躍する場がある地域になることを期待している。併せて子供たちが誇れる地域にもしたいと思うので、皆で取組んでいきたいと感じた。

[委員]

アンケート結果は、現状の不満などを中心に回答しているように思う。特に便利で豊かな生活をしたいのは誰しも思うことだが、少子化高齢化・人口減少が進むことは目に見えている。

私は地域活動で、先日、築110年の立派な建物を「市外に移り住むから売ってしまう。」と言われて現地へ行くと、昔であれば守っていく値打ちがある本当に立派な家屋ものだった。子供がいない又は少ない地域や、消防団員がなかなか集まらない地域が周辺には多くあり、様々な問題を抱えている。その地域の方々が今、30年後を想定と言われると、地域がどうなるか非常に心配だ。今私たちがやらないといけないことは、特にバブルの頃から30年~35年経過し、その時代に今の社会が想定できたのだろうか。それよりも大事なことは何だろうと考えてみた。私の地区は役所や病院、ショッピングセンター等が近くにあり便利なところだ。それでも子供たちは子供会がないのにどうするとか、消防団員が集まらないからどうしようとか、空き家が多くあるという状況だ。これからどうしていくべきか、地域住民の本当に理解を求めながら、活動に参加していただける器を作らなければならないと思う。特に少子高齢化・人口減少進むと、今まで町単位でやっていたことを地区でやらなければいけない。地区でやっていたことを市単位でやらないといけない。そうすると、北播磨地域の枠でやらなければならない事はなんだろうか。ごみの収集・焼却であったりとか、地域消防であったりとか、将来を見据えた様々な枠組みが本当にできていないのではないか。そのことを皆さんに理解を得ながら、真剣に取り組んでいくしかないと思っている。皆さんはいかがお考えか。特に言いたいことは、皆で組織を受け継いでいく力をつける。そのことが、問題が起きたときに解決する力になるのではないかと思っている。

[委員]

私が特に強調したいことは、多文化共生社会における外国人との関わり方だ。現在、約300万人の外国人住民が日本に暮らしている。在日外国人には技能実習生が多く、彼らの多くは一定期間の就労後、帰国するが、地域の日本人と結婚しているケースもある。その他の外国人就労者も多く、この外国人のマンパワーをいかに活用し、共存共栄していくかということがポイントだと思う。例えば、空き家や空き地を利用して農業を行う企画では、農業を好きな外国人に参加を促すなど、定職を持ちながら、休日に農作業を手伝うようなこともできる。お礼に「お米が取れました、どうぞ」ということから地域における繋がりが広がる。

教育については、家族帯同で来日した子ども達は地域の学校に在学する。また、出生も増えている。教育現場では、日本語が不十分な子ども達の対応が難しいと聞いている。このように次々と育つ外国人の子ども達が30年後には担い手になるという道筋をつけることが得策だと思う。いつまでもお客様やよそ者扱いの私たち日本人の態度は改めていく必要がある。外国人が地域に興味を示さないというのは、日本人からの見方であり、外国人は拒絶と受け取っているかもしれない。もし、自分が異国で暮らしたら、どんな問題が発生するか、また、困ることがあるかということ想像し、さらに共感する力をつけたい。

今年にはコロナ禍でインバウンド事業は止まっているが、通訳翻訳分野で活躍できる外国人住民を育成し、訪日外国人の対応や SNS で海外に北播磨の情報発信することができる。また、地元の産業の担い手が少なくなっている現状を踏まえ、外国人で関心がある人に繋いでいくこともできる。参考までに、豪州では過去にホワイトカラーが多くなり、水道管が破裂したときに手に職を持ったブルーカラーがおらず困ったという事例があった。そこで、高校から実技を取り入れ、人材を発掘していると聞いた。同様に、過疎地に住む東南アジアの難民が、地域の産業を活性化したモデルケースもある。

リーダーの育成という点では、日本人とともに外国人リーダーも育成して、ともに考え、汗をかくという素地を作ることが大事。多文化共生とグローバル化を推進するためには、日本人からの歩み寄り外国人を社会に受け入れることに真摯に向き合うことが必要だと考える。

[委員]

私は将来像について、現状のまちづくり政策の延長上の意見が非常に多いと思った。30年後のビジョンを語るならば、かなり長期スパンの中で、夢であるとか世の中が変わって欲しいこと等ビジョンの意見がもっとあればよかったと感じた。

その中でも特に良いなと思ったのが交通インフラの自動運転の話であるとか、IOTの先進地になって欲しいとか、在宅勤務をしながら自然を楽しんだワークライフだとか、生活様式の変化を望むところに対して非常に共感を持って、将来的に変わって欲しいことの記述をビジョンに盛り込んでいく必要があると考えている。

また、無くなって欲しくないという質問に対して、あえて無くなって欲しいものの回答で、「祭り」や「村社会」が事例に挙がっているのは気になった。これらは人によっては無くなって欲しくないと感じるものだと思う。祭りであるとか、村の付き合い交流が、現在の若者は大切と考える層が一定にある反面、煩わしいと考える一定の層もある。このように相反する意見については、今後策定していく上では、慎重な取扱いが必要ではないのかなと感じた。

[委員]

北播磨の将来像についての意見の中で人口減少・少子高齢化が進む中で、地域の活性化地域づくりを望む声が多いということは、北播磨地域の住民が、現在の豊かな自然の中で生き生きと暮らせている。満足しているということが窺えた。そのことを希望として、人口が減っていくということを受けとめて自分たちの住む地域に誇りを持って暮らすことができるように、行政としては地域づくりや伝統文化の継承を側面支援していく必要があると感じた。

興味深いことで、外国人住民はコロニーを持って生活しているというアンケート意見について、外国人住民が地域づくりに興味を持つようになって初めて多文化共生社会が実現することに繋がると思った。北播磨で残していきたいものについて興味があったのは、70代以上の方が、観光交流、歴史文化を残していきたいという意見が下の世代よりも多いことに驚いた。歴史文化の保存を望んでいると考えるが、現役引退して北播磨の良さに気づき、地域の歴史文化に興味を持つ方が多いと、我々三木市内の中でも感じている。それから北播磨の課題で交通インフラが言われているが、三木市の方でも総合計画を作成するときに市民アンケートを取ったが、交通インフラについての重要性が高い割に満足度が低いという結果が出ている。これについては、住民意識として多少不便であっても、公共交通を維持するために自分たちが乗って残そうと

いう意識の高揚が不可欠であると考えている。それから、興味深いこととして、雇用関係をよりよくしたい世代が60代に多いのは、60代が再雇用の場として地元が必要があればよいと考える人が多いのではないかと思う。それに反して若い世代に雇用関係のニーズが一見少ないようにアンケート結果から読み取れるのは、既に市外に提出しているからではないかと残念に思う。誇りについて興味深かったことは、30代以下と40代以上で感じ方が大きく違うところであり、自分にも当てはまる場所であるが、30代以下は自然環境、40代以上は地域づくり、40代以上で初めて自治会活動に参加していき地域づくりを意識するようなシステムが、田舎の社会では成立しているのかなと感じたところだ。

[委員]

アンケート結果全般については熟読させて頂き、意見として3ページに渡りまとめさせていただいたので、その内容を参考にして頂きたい。そのうえで、強いて言うならば1点、残したいところで10代のご意見が非常に厳しいと感じた。この層の方々が日本を支えていく2040年代は、日本で毎年90万人の人口が減っていくと言われている。これは政令市が1ずつ毎年なくなっていくような状況であるが、こういう「先例なき時代」を生きていく、この層の人達から見ると北播磨の「今」の姿が、自分自身の今後の人生と重なっていないということ、我々行政の人間として真摯に受けとめていく必要があると感じた。

それと、総論的な話として、今年年頭から未曾有のコロナ禍の中で、我々もこれらの対応に追われてしまった一年になったところであるが、高齢の方々とか、子育て中の方々というのはなおさらこういう活発に意見を述べる機会を作ることは難しかったなと考えている。ただ、「全県ビジョン」や、「県民局の地域ビジョン」というのは、内容的にも今後、何十年先の県民の「礎」になるような大きなプロジェクトであるので、このようなオンライン会議とか、書面決議でどんどん決めていって良いものかと個人的に疑問がわいている。

県民の方々とか、委員に入っただき、大きな夢を語る何十年に1回の機会でもあるので、政治的な関係もあると思うけれども、このようなコロナ禍の状況であるからこそ、気兼ねなく一堂に議論ができるような環境が整うまで延期するというフレキシブルな対応というの、検討する必要はないのかなということを感じている。

[委員]

私は将来像で沢山の記述をさせていただいた。ビジョンというのは、夢のある将来像が大事ではないかなと考え、将来像のキャッチフレーズを創るのは少し先のことになるのかもしれないが、多くの夢のあるキャッチフレーズを意見とした。アンケート内容で気になった、便利な田舎という部分について表現していくのがいいのかなと思う。

その他、個人的には災害が少なく非常に暮らしやすい地域であるということ、もっと売りにしていけばいいのではないかと考え、キャッチフレーズ的な表現を意見とした。夢のあるキャッチフレーズで、ビジョンを表現できればいいと思う。

[委員]

アンケート結果から感じたことについて報告をさせていただく。アンケートの結果から、北播磨地域に暮らしてよかったと思うことは、自然の豊かさや地域の繋がり、そういう回答が非常に多かったととらえている。そういったところから、地域の誇り

や地域の魅力である、自然環境、地域の繋がりは今後も守り続ける必要があると感じている。また北播磨で生まれ育った人が、今後も住み続けていくようにするためには、地域活性化や地域づくりの取り組みを更に進めていく必要があると感じている。

課題になるが、身近な交通手段の利便性向上についての取り組みに関しての意見が課題として多かったととらえている。30年後の北播磨をより良くしていくためにも、交通インフラの充実の取り組みは非常に重要になってくる。また北播磨地域は外国人住民が非常に増加している状況の中で、今回のアンケート結果において、「より良くなる」「より良くする」必要があると思うことに多文化共生の回答が非常に少なかったととらえている。外国人住民が増加しているようなところであれば、地域住民の多文化共生に関する関心度を高める必要があると感じたところである。あと、地域活性化としては、北播磨地域に住み続けてもらうために雇用の確保の必要性も感じ、そういう取り組みも重要になってくると考える。

[委員]

アンケートを見て30年先、多可町どうなるかなということを思いながら意見を考えた。今回の国勢調査は、多可町は一部過疎地域に指定されるような情報も入ってきている。うちの町だけで、何もできなくなるので5市1町が連携していかないと多可町は取り残されていくのではないかと、非常に危惧している。そういう中で多くの方々が、都市化を希望しているようだ。交通インフラについても、非常に不安があると思っている。しかしながら多可町として交通インフラの鉄軌道はないので、バスも含めて道路に力を入れていくべきと思っている。道路についても町だけでできるものではないので、近隣市町と一緒にビジョンの中で検討していく必要があると思う。

残したいものとしての自然環境は、多可町としても充実しているので、どこの市町も一緒だが、北播磨の自然環境を守り観光交流を一緒になってできないかを感じている。

また、課題の中で興味深いところは、子育てに関する意見が少ないと思う。どこの市町も共通して子育て施策を打ち出しているが、そんなに変わりはないとは思っている。そういう中で、北播磨にもっと住んでもらう、流出を防ぐようなことができないか考えていきたい。

誇りについては、やはり地域活性化について、多可町としては消防団の人員不足を非常に危惧しているが、山本委員長に団長を務めていただき、様々な活性化を図り団員が従事しやすいような改善をしていただいている。消防団を非常に重要な地域コミュニティ組織として多可町は認識をしており、そういうところを町も一緒になって改革する必要があると思う。それと山林整備とか農地の維持というところも挙げており、高齢化が進む中で山林や農地が荒れていくことがある。やはり北播磨の農産物として代表されるのが山田錦であり、山田錦もコロナ禍で非常に厳しい状況で、この農地の維持が非常に難しいことになっている。その辺も、北播磨全体で何かいい取り組み、関係人口の増加や、交流人口の増加等で山林や農地の維持を、考えていく必要があるのではないか。

(2) 検討委員会起草部会の設置案

事務局から検討委員会起草部会の設置案について 【参考資料2】 参照
(省略)

多数決で起草部会設置を承認

[委員長]

- ・起草部会長と委員は、委員長が指名することになっているため、後日、事務局と協議の上で部会長と委員を指名し、確定したら事務局から報告する。

[事務局]

- ・第3回の検討委員会は対面式で行う。
日時：令和3年1月26日火曜日 15時～16時30分
場所：滝野文化会館研修室

※会場が下記に変更になりました。

変更前) 加東市滝野文化会館

↓↓

変更後) 北播磨県民局（社総合庁舎）別館4階4A会議室